

Shakespeare's Wordplay in *The Two Gentlemen of Verona*

中 島 香 織

Introduction

Shakespeare は成長、躍進し続けた作家であり、最初から最高傑作を書いたわけではない。青年作家の特徴である未熟さ、荒削り、気取りと過剰な技巧使用と語呂合わせの多さは Shakespeare とて例外ではなく、その多くは形成過程で削られていったが残ったものは後期の悲劇作品、特に *King Lear* の中で dramatic irony として完成されたものとなる。

これまで初期喜劇の変化を中心に研究してきたが、本論文では習作期の作品 *The Two Gentlemen of Verona* (以降: *T. G. V.*) を取り上げ、そこに見られる wordplay を言語学 (linguistics) の観点から大きく4つに整理し、考察してみたい。この作品は開幕早々 (*T. G. V. I. i. 25-8* 参照) から Valentine と Proteus の “boot” を用いたウィットコンバット (wit combat) が飛び交い、即座に wordplay の世界に引き込まれる。

I 音韻論 (phonology)

音韻の遊びといえは pun である。*O. E. D.* によると pun という言葉は 1600 年頃最初に現れた。今日 pun と呼んでいるものは、Renaissance の修辞学者たちが古代から装飾として認められた数多くのことばの言い回しを細かく分けたものである。Aristotle が “The effect is produced even by jokes depending upon changes of the letters in a word; . . .”, と意見を述べているように、これは音中心のもので特に初期の喜劇ではあまりに多く見られる技法である。以下の3つに分類し例証する。

I. i 異綴同音異義性 (homophony)

異綴同音異義語は、発音は同じであるが綴り、さらには意味が異なる語を指す。同音異義語の区別を図るため別の綴字を用いる現代の習慣は、Elizabeth 時代にはあてはまらない。Shakespeare の作品の中で見ら

れる良く知られたものには “hair-heir/right-rite/sole-soul /son-sun” があるが、本作品では次の例を挙げる。

Speed: Twenty to one, then, he is *ship*'d already,

And I have play'd the *sheep* in losing him.

(*T. G. V. I. i. 72-73*)

この遊びは sheep を [ʃi:p] と発音する現代においては成立しない pun である。*O. E. D.* によると当時、sheep においては ship [ʃip] と同じく [ʃip] と発音されていた。ship は vt. で「乗船する」の意。sheep は 1. 羊:羊皮, 2. 気の弱い人; 臆病な人; 愚かな人, 3. (the~) 信者の意味を持ち、ここでは坪内逍遙訳 (Speed: ぢゃ, 十が九つ, もう乗船 (シーブ) なすったでせう。/見失った手前は好い羊 (愚者) (シーブ) でした。) からも判断できる通り, 1 と 2 を意味している。これは会話ではなく同一人物の語りである。Speed という名前のごとく迅速でテンポ感のある判りやすいことば遊びである。

I. ii 同綴同音異義性 (homonymy)

同綴同音異義語とは綴り字と発音は同じだが意味に違いが生じるものを指す。この場合、ほとんどの辞書には各語は別々の見出し語で記載される。Mahood (2001) の計算によると “dear” を用いたこの種の遊びは、Shakespeare のことば遊びリストの最も高い位置を占める。本作品からは “pound” を使った例を挙げることにする。

Proteus: Nay, in that you are astray, 'twere best
(1) *pound* you.

Speed: Nay, sir, less than a (2) *pound* shall serve
me for carrying your letter.

Proteus: You mistake; I mean the (3)*pound*, a pin-
fold.

Speed: From a (4) *pound* to a pin? Fold it over and
over,
'Tis threefold too little for carrying a letter to your
lover.

(*T. G. V. I. i. 101-06*)

Proteus はギリシャ神話に登場する変身に巧みな海の神の名前であり、その名の通り本作品中でもころころ変化している。ここでは Speed を伴って単語 pound に展開を与える結果となっている。下線部 (1) から (4) pound の綴りは全て同じであり発音も [paund] と同一である。意味に関して、(1) と (3) は v. 禁固にする (=pinfold) であり、(2) と (4) は n. 金庫・ポンド (英国通貨) であるという違いがある。この違いを利用し、遊びを成立させている。やはり Proteus の方が変化 (変身) に富んでいるのでこのウィットコンバットにはまだ続きがあるが、彼の勝利で幕を閉じることになる。

I. iii 音の類似性

(phonetic similarity/malapropism)

ここではことばの誤用 (malapropism) について取り上げる。これは誤って使われた語が新語と考えられ独立した語となったものである。malapropism とは風習喜劇の伝統作家である Richard Sheridan の *The Rivals* (1775年) 中のことばの誤用で有名な登場人物 Mrs. Malaprop にちなんで命名されたことばである。例えば Comparisons とすべきところを間違えて “Comparisons don't become a woman.” と言ってしまうなどがそうである。Shakespeare はこの作品より先にこの種の用法を用いている。T. G. V. に見られるのは次の用例である。

Host: Now, my young guest, methinks you're *allycholy*. I pray you, why is it?

Julia: Marry, mine host, because I cannot be merry.

(T. G. V. IV. ii. 26-28)

melancholy (憂鬱) とすべきところを allycholy (陽気) としている。観客はそれを謝りと分かるため、その誤用が笑いを引き起こすことになる。だが本来の語よりも誤用の方が真意を伝えるという点では効果的であることも多い。この誤用した単語は Shakespeare の新語としても扱われる。

II Semantics (意味論)

ことばには辞書的意味、比喩的意味、慣用的意味等、さまざまな意味が存在する。ここでは意味の多面性を生かした用例に焦点をあてる。

II. i 多義性 (polysemy)

多義語はどの言語の歴史上のどの時代にも見出すこ

とができ、T. G. V. も例外ではない。

Julia. Some love of yours hath writ to you in rhyme.

Lucetta. That I might sing it, madam, to a tune.

Give me a *note*; your ladyship can *set*.

Julia. As little by such toys as may be possible:

Best sing it to the tune of 'Light o' Love.

Lucetta. It is too heavy for so light a tune.

Julia. Heavy? Belike it hath some *burden* then?

Lucetta. Ay; and melodious were it, would you sing it.

Julia. And why not you?

Lucetta. I *cannot reach so high*.

Julia. [taking the letter] Let's see your song. How now, minion?

Lucetta. Keep *tune* there *still*: so you will sing it out.

[Julia strikes her.]

And yet methinks I do not like this *tune*.

Julia. You do not?

Lucetta. No, madam, 'tis too *sharp*.

Julia. You, minion, are too saucy.

Lucetta. Nay, now you are too *flat*;

And mar the concord with too harsh a *descant*:

There wanteth but a *mean* to fill your song.

Julia. The mean is drown'd with your unruly *bass*.

Lucetta. Indeed I bid the *base* for Proteus.

(T. G. V. I. ii. 79-98)

Julia は本作品の冒頭から終わりにかけて *wordplay* の頻度が2倍になっていることから考えても納得が行くが、音楽に関してよく多義語を使う。音楽に関してはIV章で詳しく述べることにし、ここでは比較を容易にするため、文中の意味と音楽用語の意味とを表にまとめておくに留める。

	文中の意味	音楽用語
note	返事の手紙	メロディ
set	書く	合わせる
burden	荷物	拍子文句
cannot reach so high	身分の高い方には手が届かない	そんな高い音には声が届かない
tune still	落ち着いた気分	静かな調べ
tune	なさり方	調べ
sharp	やり方がひどい	半音高い
flat	平手打ち	半音低く
descant	のぼせ方	高音部
mean	=moan 私のうめき声	テノール
bass/base	鬼ごっこ	低音

II. ii 文字通りの意味 (literalism)

意味を考える場合、ある単語の意味は、文字通りの意味と発展的意味によって様々な違いが生じる。以下の例はこの違いを利用した遊びである。

Speed: How now, Signor Launce! What news with your *mastership*?

Launce: With my *master's ship*? Why, it is at sea.

Speed: Well, your old vice still: mistake the word. What news, then, in your paper?

Launce: The black'st news that ever thou heard'st.

Speed: Why, man, how black?

Launce: Why, as black as ink.

(*T. G. V. III. i. 278-284*)

Speedに“your old vice still: mistake the word.”「また駄洒落か。あいもかわらず言葉をはねりやがって。」と不平を言われているように道化 Launce は“*mastership*”という本来抽象語であったものを“*master's ship*”（主人の船）に曲げる。Launce については多くの研究者がその役割について言及している。T. M. Parrott に寄れば“Launce is a true Clown, the first and one of the best of the noble company of Costard, Bottom, and Dogberry.”とあるように彼は悪の道化の発展したものである (*T. G. V. I. i. 101-04* 参照)。Shakespeare は彼らを笑い者から高めて彼ら自身の特別な劇的役割つまり無意識なユーモアの天分を与えている。

このことば遊びはのちに *Twelfth Night* (III. i. 1-10) の中で形式を変え機能的発展を遂げ使用されている。

III Morphology (形態論)

英語の単語は、book のように意味のうえからそれ以上分割できない1つの構成要素からなる単純語と、2つ以上の構成要素からなる合成語に分けられる。合成語はさらに、unkind のように単純語に接辞が付いた派生語と、schoolboy のように2つの単純語が統合した複合語に分けられる。このような語の内部構造を研究するのが形態論である。

今回はその中の word-formation (語形成) について論じてみたい。これには、自由形態素に接辞を付加したり、単純語を組み合わせたたり、品詞を転換したり、語の1部を省略したりするなどの方法がとられる。

III. i 造語 (neologism/coinage)

Shakespeare の造語は現代常用されているものが多

く、また多くの作家にも影響を与えた。ことばの魔術師と言われている Lewis Carroll (1832-1898) も影響を与えられた一人である。岡村 (1996) によると *T. G. V.* の中に見られる造語は全部で36と計算されているが、ここではそのうちの数例を観察する。

他の作品でも使用頻度の高いものには“black” (*T. G. V. III. i. 284*) があり、現代でも使われるものに“unrivalled” (*T. G. V. V. iv. 142*) などがあるが、その他にも以下の例がある。

Speed: Why didst not tell me sooner?

Pox of your *love-letters*!

(*T. G. V. III. i. 370*)

これは「人を恋い慕う短い手紙」を意味する noun の例である。Valentine の召使 Speed は道化 Launce を彼の指示に対しての反応が遅いこと、そして Launce の愛するひとからの手紙についての話をそらしたことでこのしる。用語“love-letter”（現在では通常ハイフンなしで表記される）が Shakespeare の作品中出てくるのはたった2回だけである。つまりあと1つは *The Merry Wives of Windsor* の中 (*M. W. W. II. i. 1*) にしかない。Mistress Page が Sir John Falstaff からの手紙を受け取って驚く場面である：“What, have I scap'd *love-letters* in the holiday-time of my beauty, and am I now a subject for them?”

続く noun の例は“a small dog”を意味する“puppy”であり、*O. E. D.* によると15世紀に最初に記録されている。この単語は“doll, toy,”を意味する Middle French “poupée”, に由来する。そして Latin は“girl, doll”を意味する“pupa”であり、またこれに関連する English の単語は“pupil”と“puppet”である。現代の“a young dog”を意味する最初の用例は *T. G. V.* の中に見られる。Launce は悲しそうに次のように彼の犬のことを話す。

Launce: one that I brought up of a *puppy*, . . .”

(*T. G. V. IV. iv. 2-3*)

Shakespeare はまた *The Tempest* の中でも関連した複合語を使用している。Trinculo は Caliban に会って笑いながら“at this *puppy-headed* monster” (*Tp. II. ii. 154*) という。この“puppy-headed”は“stupid”の意味である。

verb の例においては「形が変化する；変化させる」を意味する“metamorphoze”がある。

Proteus: Thou, Julia, thou hast *metamorphos'd* me, Made me neglect my studies, lose my time,

(*T. G. V. I. i. 66-67*)

Proteus が Julia に対する愛について独り言をいう場面である。ここでの metamorphose は *meta-* (“among, with, after”) + *morphe* (“form”) + *metamorphosis* (“a change or transformation”) で構成されており、Greek 起源のことばである。この類義語 “metamorphose” はまた Shakespeare の初期の 15 年間までの作品に日付をさかのぼる。verb 形はこの作品中で 2 度以上表れる。召使い Speed が Valentine に次のように言う場面である。

Speed: now you are *metamorphos'd*
with a mistress, that when I look on you, I
can hardly think you my master.
(*T. G. V. II. i. 29-31*)

IV Expression (表現法)

ここでは音韻論、意味論、形態論にあてはまりにくいと考える wordplay を表現法とし、取り上げてみる。

IV. i 矛盾語法 (oxymoron)

「一見互いに矛盾する二つの語句を結びつけることによって、かえって強い効果をあげようとする表現法」(『現代英語学辞典』) という矛盾語法はこれから後の Shakespeare 作品でしばしば用いられることになる。その初期段階の本作品中では次のようである。

Julia: O, know'st thou not his looks are my soul's
food?
Pity the dearth that I have pined in,
By longing for that food so long a time.
Didst thou but know the inly thouch of love,
Thou wouldst as soon go *kindle fire with snow*
As seek to quench the fire of love with words.
(*T. G. V. II. vii. 15-20*)

下線部の “*kindle fire with snow*” (雪で火を起こす) という反意語表現は fire⇔snow (火と雪) という相反するものを引き合いに出して Julia の Proteus に対する気持ちの劇的効果を高めている。この表現はのちに *A Midsummer Night's Dream* の中で (*M. N. D. V. i. 56-60*) Theseus と Philostrate の会話の中でさらに発展され使用されている。

IV. ii 音楽用語でのあそび (harmony)

音楽用語での遊びは多く、前述の章 II. i 多義性の中でも例示したように音楽用語を掛けて用いていた。ルネッサンス期からバロック期にかけてのイギリス

は、文化の花が開き、音楽が市民層まで浸透していた時代だった。宮廷人、貴族たちだけでなく市民層までが楽譜を手に入れ気軽に音楽を楽しんでいた。また当時のイギリス演劇は音楽劇的な性格を持っていて、Shakespeare も音楽を効果的に取り入れ、劇的な要素を高めた。彼は作曲までするほどだったので音楽理論にはかなり精通していたと考えられ、伴奏音楽に限らず音楽の多種多様性を活かしたことば遊びを作り出し、音楽関連の術語によって意味の二重性をもって遊んだ。

話の本筋に戻して最初の場面 (*T. G. V. I. ii. 79-98*) では彼女のメイドの Lucite が Proteus からの手紙を差し出すことから始まる。Julia はそれを読もうという彼女の強い要望を抑え、それから次々とする wordplay の中に彼女の押し殺した感情に対してのはけ口をあたえる。これは実際に音楽に関しての Shakespeare の細かい技術的知識を例証している。同様の出来事がこの劇の第 IV 幕 ii 場においても起こる。それは小姓に変装した Julia が、Proteus が Sylvia に求婚しているというのを聞く場面である。このような例は 2 重の意味を伴ってかれらの真意を取り出す後の劇においての登場人物の心を反映している。習作の頃においてはその場かぎりの効果で終わるが、後の作品 *Romeo & Juliet* (*IV. v. 102-38*) では音楽が 1 場面にも影響するだけでなく作品全体をとらえたものとなる。

Final remarks

以上 *The Two Gentlemen of Verona* を音韻論、意味論、形態論、表現法という 4 つの観点から観てきた。wordplay 全てを一つ一つここで論じることは出来ず、ほんの数場面を取り上げて観察しただけである。けれども *T. G. V.* の wordplay の特徴と、この作品で見られる遊びが彼の作品にどう発展するかを明らかにすることはできたと考える。複雑な解釈がなく、語の連想が活発なために生ずることば遊びは、初期の作品において著しい。音、意味、形態、表現それぞれの遊び (game) は観客の心をとらえ、そのことばは当時の質素だった舞台美術や音響などの設備を装飾したと言える。*T. G. V.* は決して傑作と言えるものではないけれども、Shakespeare の初期喜劇において主な構造的特徴を示しており、発展した後の作品を暗示しているものとして考えられる。

後期の作品にみられるような芸術的に完成度の高い wordplay、つまり後期の最高傑作 *King Lear* の中で、

dramatic irony を形成したり、悲劇的な状況の中に話者の精神の平衡を保たせたりしているような遊びが、成長した Shakespeare を確信させるものであろう。今後は今回取り上げた作品以外の early comedies も引き続き分析し、*King Lear* に至るまでの初期喜劇の中での単なる遊びから始まり技巧的になるまでの変化を観ていきたいと思う。

Text

『シェイクスピア大全』CD-ROM, 新潮社, 2003年。

Work Cited

- Joseph, Sister Miriam, c. s. c. *Shakespeare's Use of the Arts of Language*, Columbia University Press, New York, 1947; rpt. 1949.
- Mahood, M. M. *Shakespeare's Wordplay*. Methuen & Co. Ltd. 1957; rpt. 2001.
- McQuain, Jeffrey and Malless, Stanley. *Coined by Shakespeare*. Merriam-Webster 1998.
- Cox, L. Roger. *Shakespeare's Comic Changes—The Time Lapse Metaphor as Plot Device*. The Univ. of Georgia Press, Athens and London. 1991.
- The Oxford English Dictionary*. Oxford University Press. 1933; rpt. 1978.
- 岡村敏明『シェイクスピアの新語、新語義の研究』溪水社, 1996年発行。
- 栗駒正和著『シェイクスピア ことばと音楽』南雲堂, 1978年発行。